

## 宋學の源流に於ける禪的環境

久須本文雄

宋代儒學の特徴は主として實踐道徳と訓詁とを生命とし特色としたる從來の儒學に對して、哲學的な解釋をなし性理學の究明を主眼としたる所に存するもので、孔孟の原始儒教と趣を異にしたる幽玄精微な哲學的色彩を帯びたる儒教哲學となつて現われたのである。宋代に至つてかゝる新思想的傾向が儒學界に醗酵されたのは、主として社會的な事情と思想的な影響とに基因しているとすべきで、前者は宋室即ち太祖、太宗、眞宗、仁宗等の尊儒崇佛によるものであつて、後者は訓詁學の反動、禪學の影響、老莊思想の影響等の三因を擧げることが出来る。宋學勃興の原因は此の四項目に要約されるが、殊に禪道兩學の思想的影響に依つて宋代儒學が哲學的傾向を帯びてきたとも謂うべきである。宋代儒學が醗成された環境に就ては上述の四種原因を究明すべきであつて、特に思想的原因を明かにすることに依つて宋學の眞相を窺見することが出来ると思う。それで宋學の源流を窺うには四種の環境に就て究明すべきであるが、本論文は殊に禪的な環境に就て論述を試み、他の環境に就ては後日の研究に譲りたい。初期の宋代儒學に於ける禪的環境の全般に互つて論述すべきであるが、特に宋學の祖と稱謂されている周濂溪に就てその禪的氛圍氣を究明しようとするものである。周子の禪的環境を明かにすることに依つて、宋學の源流に於ける禪的環境の一般を窺見することが出来ると考へる。此の研究に依つて周子は勿論彼を中心としたる宋學の源流に如何に禪的思想の影響を蒙つたかを知ることが出来る。宋學を醗成したる原因には種々あるが、殊に此の禪學の影響がその主因をなすものであら

うと考えられるし、禪的思想の影響を無視しては宋學は考えられないと思う。宋代は特に禪界の巨匠輩出して隆盛を極めたが、これ宋室の敬佛に因るものであることは論を俟たない。それで禪的環境を窺うには宋室の崇佛に就て論及すべきであるが、論作の都合上後日の研究に譲ることにする。上述したる如く本論文は主として周子に於ける禪的環境を論述し、これに依つて宋學の源流に於ける禪的環境の一般をも窺見しようとするのであるが、最初(一)に於て周子の著作と考えられている問題の太極圖並に太極圖說の作傳に就てその異説を検討し、殊に佛者傳承説の項に於て壽涯並に壽涯と濂溪との關係を論述し、次に(二)に於て周子の學禪の狀態を諸種の資料に徴して史的考證を試み、併せて親友關係の事項にも論及したいと思う。此の論稿の次に濂溪思想と禪との關係を論述すべきであるがこれも後日の研究に譲ることとする。

## (一)

周濂溪の太極圖及び太極圖說の傳承に就て古來紛々たる異説が存して議論一定しない所で問題は極めて複雑化している。太極圖の傳承に關する諸説中、主なるものを列擧して分類すると凡そ次の三説に要約され得る。

第一は周子獨創説であつて、太極圖を以て周子の自得であり創作であると主張するもので、主として朱晦菴、張南軒等の説く所で、これは全く佛老者流の關する所では無いとしている。

第二は道士傳承説であつて、太極圖を以て老莊者流の所傳であると主張するもので、此の説の先驅をなしたのは謝上蔡の門人宋の朱震(號漢上)であつて漢上易傳の進周易表に説く所で、その他、胡五峯の通書序略、陸象山の文集等に於ける説である。

第三は佛者傳承説であつて、太極圖を以て佛學者流殊に禪僧の所傳であると主張するもので、宋の晁公武の郡齋讀書志、元僧學隱本誠の性學指要、明僧空谷景隆の尙直編等に於ける説である。

以上の如く周子太極圖の傳承に關しての三説を擧げて簡略にその要旨を述べたのであるが、順次その三説を検討して、いづれの説が穩當であるかを窺つて見よう。

#### 一、周子獨創説

本説は太極圖並に太極圖説が他者からの傳承では無くして、周子自らの獨創であり天與自得のものであるとするもので、朱張等の主張する所で、朱子の説は彼の太極圖解並に通書解の序跋、江州重建濂溪先生書堂記、伊洛淵源録等に見られる。朱説の要旨を窺うと濂溪先生書堂記に

若濂溪先生者、其天之所與而得乎斯道之傳者與……蓋自周衰孟軻氏沒而此道之傳不屬、更秦及漢、歷晉隋唐、以至子我有宋、聖祖受命、五星集奎、實開文明之運、然後氣之濁者醇、判者合、清明之稟、得以全付乎人、而先生出焉、不由師傳、默契道體、建圖屬書、根極領要、當時見而知之……周公孔子孟氏之傳、煥然復明於當世、(文集、七八)

#### 尙、彼の通書後記に

通書者濂溪夫子之所作也、夫子姓周氏名惇頤字茂叔、自少即以學行有聞於世、而莫或知其師傳之所自、獨以河南兩程夫子嘗受學焉而得孔孟不傳之正統、則其淵源因可概見、(文集、八一)

これ等に徴して明瞭であるが如く、朱子は他の圖説傳承説を排し専ら周子が師傳に由らずして、自ら道體を默契した極圖、太極圖説、及び通書を制作し孔孟不傳の正統を得たものとしている。次に張南軒の説を見るに

惟周子生乎千有餘年之後、超然獨得大易之傳、所謂太極圖乃其綱領也、(宋元學案、卷五〇、南軒學案條)  
或は韶州濂溪先生祠堂記に

某嘗攻先生之學、淵源精粹、實自得於其心、而其妙乃在太極一圖、(南軒文集、卷一〇)  
尙、邵州復舊學記に

惟侯唱明絕學于千載之下、學者宗之所謂濂溪先生者在、當時之所建立、(同上、卷九)  
尙、南軒の太極圖說解序に於て

太極圖乃濂溪自得之妙、蓋以手授二程先生者、或曰、濂溪傳太極圖於穆修、修之學出於陳搏、豈其然乎、此非諸子所得而知也、其言約、其義微也、自孟子以來未之有也、通書之說大抵皆發明此意、

とて、明道、伊川の二程道學の傳が濂溪より發し、太極圖は周子自得の妙にして周子は太極圖を穆修より傳授されたものでないこと等を論じている。周子の太極圖並に圖說は千載絶學の後に唱明し、獨自體得のものとしているのを以てしても、朱説と同じく周子自得説であること首肯せられる。此の張南軒の周子自得説は朱子の説に據るものであつて、而して朱子説は胡五峯の所謂「今周子啓程子兄弟、以不傳之妙、」(通書序略)或は潘清逸の所謂「濂溪作太極圖易說易通、」(濂溪先生墓誌銘、周子全書卷六)の周子獨創説を主なる根據としているのである。

かく朱張兩子の周子獨創説を窺見したのであるが、特に朱子が儒教の尊嚴維持の爲めにも方便的に假托したる傾向が濃厚であり、尙、朱子が諸本に基き周書を編纂するに際し、圖說の傳授に關して從來の周子獨創説に疑念を抱き是正しようとしたが、病を得て遂に果さず(再定太極圖解後序、朱子文集、卷七六參照)に終つて居り、尙又、朱子は

張忠定公、嘗從希夷學、而論公事之有陰陽、頗與圖說意合、竊疑、是說之傳、固有端緒、至於先生、而後得之於心、而天地萬物之理、鉅細幽明高下精粗無所不貫、於是始爲此圖以發其秘耳、(同上)

とて、濂溪學が陳種穆より傳授されたことを認めたる如き口吻を洩していることからしても、周子自作説は信憑すべき説ではないと考えられる。尙、荻原擴氏の「周濂溪の哲學」(二一〇頁以後)に於て、朱子説の缺點として即ち(一)、以前の圖說傳説に對する檢査の不徹底、(二)、立論の根據薄弱、(三)、獨創性の缺乏、(四)、理論的矛盾、(五)、用語の不適切、等の五條を擧げて該説の非なることを反駁證明している。今その要旨を摘記して見ると次の如くである。即ち

第一、朱子は陳穆壽涯の諸傳説を十分批判的に考察すべきであるに關らずその考慮を缺いた。即ち漢上、五峰等の

説を輕んじて批評不徹底に了つた。

第二、濂溪自得説は根據を潘誌にのみ置いた。その基礎に潘誌は絶対に正しいとの假定を含む。

第三、朱説も亦獨創的ではなくして五峰、南軒の説を基礎としている。一方五峰説に對し「潘誌を見ずして云云するのみ」と評しつゝ、他方其の説を攝取して自己の見解を作つた。

第四、朱子の濂溪自得説は其の道統論を示すものであるが、之には大いなる矛盾がある。何ぞや矛盾とは。一方濂溪の天授自得を主張しつゝ、他方二程が直接孔孟不傳の學を繼承したと屢、説いて居る事實を指す。

第五、不由師傳、默契道體、得傳於天、又は承天畀、等の語適切ならず。

尙、同書（二二七頁以後）に於ても濂溪には豊富な學識と獨創力を缺いてゐるとして、周子自作説を論駁してゐるがこれは稍、酷評に過ぎると思ふ。蓋し朱子の周子自作説に對する疑念並に荻原氏の説に徴しても、太極圖及び圖説は他者よりの傳承であつて濂溪自らの獨創によるものでないと思ふ。かく周氏獨創説は首肯することの出来ない否定的結論に歸着したから、更に論を進めて第二の道士所傳説を検討することとする。

## 二、道士所傳説

此の説は太極圖が宋初の道士陳搏より種放、穆修を経て周濂溪に傳授されたとする見解で、朱熹上の説がその嚆矢をなすものである。朱震は漢上易傳の進周易表に

陳搏以先天圖傳種放、放傳穆修、修傳李之才、之才傳邵雍、放以河圖洛書傳李溉、溉傳許堅、堅傳范諤昌、諤昌傳劉牧、修以太極圖傳周敦頤、敦頤傳程頤程顥、云云、（宋元學案、卷三七、漢上學案）



と記してゐる。朱震の説によつて太極圖の傳系を表示すると次の如くである。

此の朱説によると、太極圖は陳搏に由來し、陳搏は种放を経て穆修より周濂溪に傳授し、更に周子は二程子に相傳したのである。此の朱震の陳搏傳授説は太極圖の作者が陳搏であることを意味しているものとすべきである。次に胡五峰の傳授説を窺うに

通書四十章周子之所述也、(省略) 推其道學所自、或曰、傳太極圖於穆修也、傳先天圖於种放、放傳於陳搏、此殆其學之一師歟、非其至者也、(通書序略)

とあるが如く、周子が太極圖を陳搏より傳受したるものとして、胡五峰は朱震と同じく陳搏傳授説をなしているけれども、それらを學の師としては「非其至者也」として輕視していたと謂うべきである。茲を以て彼の所謂「今周子啓程子兄弟以不傳之妙」(序略)に徴して、陳搏傳授説よりも寧ろ周子獨創説にあるものと謂うべきである。

朱震の陳搏所傳説に對して賛否の兩説がある。即ち朱晦菴並に度性善は否定的態度をとり、陸象山並に毛西河は肯定的態度をとつている。朱度陸毛四家の説の出現を見るに、朱子説は圖說通書再定後序に、性善説は濂溪年譜附説に而して象山説は文集卷二の與朱元晦書に、西河説は太極圖説遺議に各、論述している。此の四家の説に就ては省略するが、殊に反對論者の朱子に於ては、潘清逸の濂溪先生墓誌銘によつて考定しないことに由る朱震の誤謬であると斷じている。既に提示したる如く、朱子は潘誌に所謂「濂溪作太極圖易說易通」を唯一の根據として、周子獨創説を提唱せんための論評で獨斷的傾向が見られる。周子獨創説の項に於て論述したるが如く、該説を肯肯することは出来ないと思う。

太極圖の作者に關して、朱漢上を始めその他の諸家は陳搏説を提唱しているが、此の説とは異なつた説がある。即ち黄宗炎の河上公説と佛祖統記の麻衣道者説とを擧げることが出来る。

黄宗炎は黄宗羲の弟にして、彼の著作虞忠學易の中に太極圖辯があるが、宋元學案に黄百家が叔父宗炎の説を載せている。即ち冒頭に周子の太極圖は漢の河上公によつて創始されたる方士修鍊の術であると記して、次の如く圖の傳



これは傍系として見るべきである。

以上太極圖の作成傳授に就て朱震の陳搏説、黃宗炎の河上公説、佛祖統記並に毛西河の麻衣説を窺見したのであるが、これ等を見ると各説共相當の理由が存して一概に排することは出来ないと思うが、又肯定することも出来ない。依つてこれ等該説の略評を試みてその眞僞の點を明かにしたい。

最初、陳搏説であるが、此の説を提唱したる朱震は上蔡門の最著で、紹興七年卒するや高宗が衷心痛惜したる程の人物で、彼の著作に漢上易集傳十一卷、卦圖三卷、叢説一卷（四庫提要、卷二、易類）があり、その學識は經學深醇と評せられ清の全祖望は「然漢上之立身則粹然眞儒也」（宋元學案、卷三七、漢上學案）と述べている。然し彼の説には稍、穩當を缺く所が散見している。即ち彼の漢上易解に

以易傳爲宗、和會雍載之論、上采漢魏吳晉、下逮有唐及今、包括異同、庶幾道離而復合（宋元學案、同上）

と記しているのを見ると、自説に於て從來諸家の易説を全部統合せんとしたる態度が見られる。茲を以て全祖望は「漢上謂周程張劉邵氏之學出於一師」として周程張劉邵諸家の易學は總べて陳搏に據くとす朱震の言を載せて「其説恐不可信」と評しているが、四庫提要に於ても「其説頗爲後人所疑」（漢上易集解の條）と論評している。漢上の陳搏説は最も古い一説として存すべきであるが、容易に信を置くことは出来ない。胡五峰の説は蓋し一面陳搏説であり他面周子獨創説をなして、彼の意が寧ろ後者にあるが如きであるが、稍、穩當を缺いていると評すべきである。彼は「此始其學之一師歟、非其至者也」と論じて、陳搏を周子の學師としては輕視して居り疑問の見解を持つているのを見ても陳搏説は眞を缺くものと謂うべきである。かくの如く陳搏作爲説は信することが出来ないが、陳搏は宋史（四五七、隱逸傳）にその傳が記載され、宋の太宗より希夷の號を賜うた著名な道士でその實は確實である。

次に毛西河並に佛祖統記に於ける麻衣道者説に就てであるが、麻衣と宋の太祖との問答を歐陽外傳疏（歐陽外傳は祖秀禪師の作であるが疏の作者は不詳）に記しているが、それを佛祖歷代通載（卷二六）に轉載しているのを見るに、

因問<sup>三</sup>神僧麻衣、天下何時定、麻曰、甲子方大定、仍對以<sup>三</sup>武廢教之禍、帝深然<sup>之</sup>。

と。これは通載の太祖初年建隆元年の條に記載してあるのであるが、かゝる説話を全く首肯することも出来ないし、又、神僧傳にも麻衣傳が無い所からしても稍、疑問視している。尙、陳搏が傳受したとされる麻衣易に就て、朱子は文集卷八一に於ける書麻衣心易後（淳熙四年撰）並に再跋麻衣易說後（淳熙十四年撰）の跋文に於てその僞作であることを論じている。茲を以て麻衣傳の詳細は不明であり麻陳傳授を確證すべき資料が無いので、太極圖の麻衣作傳説も信憑することが出来ないが、然し彼は五代宋初の人物であることは推定される。

次に黄宗炎の河上公說即ち無極圖（太極圖）が河上公によつて創始されたる方士修鍊の術であるとして見解であるが、その河上公傳に就て陸徳明の釋文叙録によれば、漢代の文帝の時、河上即ち陝州の河濱に居住していた隱者で、老子章句四卷を著作したと述べているが、此の河上公の實在は疑問で架空の人物としか考えられぬ。依つて河上公創始説は捏造したる虚説で信することが出来ない。

以上作圖に關しての陳搏説、麻衣説、河上公說の略評をなしたのであるが、三説共信憑することが出来なくなつた。依つて圖の作者が誰であるかに就ては解らないが、然し道家者流の徒がこれを作爲し、陳搏が傳えたものと推定して置きたい。

圖の作者とその傳授者とに就ては略、上述の如く考定したのであるが、次に圖說の作者に就ての問題である。此の圖說作爲者に就ても容易に確定することは困難であるが、陳搏説、种穆説、濂溪説の三説が考えられるからこれ等各説に就て考察してみよう。陳搏説に就て窺見するに陳搏を圖の傳授者として推定したる點から、尙、彼が實に高宗から崇敬された博學の士である所から推察すると、圖說作者として適當な人物とも考えられる。彼を作者と假定した場合、陳搏が自ら筆録しないことも考えられるから、その時は門弟の种穆等が師説を録したとも考えられる。黄宗炎が周子を圖說作者としている様に窺見されるが、周子の學說思想の點からして此の周子説も首肯される。かく考えると

その推定は容易では無いが、三説の中、陳搏説と濂溪説が有力と考えられる。圖の作者が道士と推定されたから陳搏だらうとも推定されるが、然し此の圖説作者は陳搏か或は濂溪かの誰かであらうと推定して置きたい。

### 三、佛者傳承説

此の説は第二道士傳承説の項に於て、太極圖説の作者を道士としその傳授者を陳搏であらうと推定したるのとは異つて、該圖が佛者殊に禪者の作爲と傳授とに依るものとするのである。此の禪者傳承説は晁公武の郡齋讀書志に於ける宋の晁景迂の言並に度性善の濂溪年譜、濂溪志、及び空谷景隆撰の尙直編等に見られる周學の佛者淵源説を指すものである。此等の資料に基いて佛者傳承説を窺つてみよう。

#### 晁公武の讀書志に因れば

晁景迂云、胡武平周茂叔同師<sub>二</sub>潤州鶴林寺僧壽涯<sub>一</sub>、其後武平傳<sub>二</sub>其學于家<sub>一</sub>、茂叔則授<sub>二</sub>二程<sub>一</sub>、(卷一)と記してあるが如く、周濂溪の學師を潤州鶴林寺の僧壽涯としている。尙、周子が壽涯に師事して先天地の偈を得たことに就て、黃百家は宋元學案(卷一二)に晁公武の言としてこれを次の如く掲せている。

晁氏謂、元公師<sub>二</sub>事鶴林寺僧壽涯<sub>一</sub>、而得<sub>二</sub>有物先<sub>一</sub>天地、無形本寂寥能爲<sub>二</sub>萬象主<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>四時<sub>一</sub>、凋<sub>レ</sub>之偈、<sup>甲</sup>  
尙、同じく宋元學案にも次の如く記している。

#### 周子又得<sub>二</sub>天地之偈于壽涯<sub>一</sub>、

上掲の讀書志引用の文は南宋胡一桂の周易啓蒙翼傳(伊川易傳條)並に毛西河の太極圖説遺議にも引用されている。次に度性善の濂溪年譜(周子全書、卷五)には濂溪と壽涯とに就て次の如く記している。

或謂先生胡文恭公、同師<sub>二</sub>潤州鶴林寺僧壽涯<sub>一</sub>、或謂邵康節之父避<sub>二</sub>逅文恭於廬山<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>隱者老浮圖<sub>一</sub>遊、遂同授<sub>二</sub>易書<sub>一</sub>、所謂隱者疑卽壽涯也、

宋元學案(卷一二)に引用している濂溪志の文には次の如く記している。

先生嘗至三澗州、與三濂溪二遊、或謂濂溪與三先生一同師三澗州鶴林寺僧壽涯、或謂邵康節之父邈 邈先生于廬山、從隱者老浮屠二遊、遂同受三易書、(文恭公先生宿條下附錄)

濂溪年譜と濂溪志との文を比較して見るに、前者には「先生嘗至三澗州、與三濂溪二遊」が省略されて居り、後者には「所謂隱者疑即壽涯也」を缺いているがその他は大同小異である。

茲に列記したる晁公武並に度性善の説に就て考察して見よう。公武が讀書志に掲げたる晁景迂であるが、景迂は仁宗嘉祐四年(西紀一〇五九)に生れ南宋高宗建炎四年(西紀一一三〇)七十二歳を以て歿したのであるが、濂溪の歿年には景迂は志學の年に達していた。かく景迂は濂溪の晩年期にまたがつて居るから濂溪師僧説中最古の説と謂うべきである。公武は如何なるものに據つて讀書志に記したのであるか不明であるが、上述の如く景迂が濂溪在世期の人物であり、彼の説が最古のものである所から考へても、濂溪が壽涯に師事したとなす景迂説は疑問の點もあらうが一應是認して置く。晁公武、胡一桂、毛西河、黃百家、度性善、空谷景隆、並に常盤大定氏等の諸家皆景迂の言を基として此の説を肯定している。讀書志に於ける景迂の言に徴して明かである如く、濂溪の師に壽涯があつたと記するのみで、何等太極圖なり易書なりを壽涯より得たとは述べていない。その所謂「其學」とは佛學としか考へられず易學なるものを指示しているとは思われない。それで常盤大定氏がその著「支那に於ける佛教と儒教道教」の壽涯條(二〇四頁)に於て讀書志並に周子全書の文として記載している「胡武平と共に太極圖を受けて之を二程子に授けたりといふ」に所謂「太極圖」は首肯することが出来ないし、又、讀書志並に周子全書には此の太極圖なる語が記されていないから曲解と思われるし、尙、常盤氏は濂溪が壽涯より先天地偁、易書、太極圖を受けたことを認めているが疑問とすべきである。

次に讀書志並に濂溪年譜等に所謂澗州鶴林寺僧壽涯に就て考察しようとするのであるが、此の澗州鶴林寺並に廬山傳説に就て検討して見たい。

壽涯の住したと謂われる潤州鶴林寺は林間録に據るとその舊名を京江の竹林寺と稱呼していた。大明一統志によると鶴林寺は黃鶴山にありて舊名を竹林寺と稱して居り、尙、一統志には三國の吳の時に鎮江府に京に鎮を置き唐初に至りて潤州を置くとして記してある。尙、毛西河は遺議に於て胡汲仲の大同論に所謂北固竹林寺僧壽涯を引用して「按竹林即鶴林北固即潤州」と記している。一統志並に林間録等の記事に徴して京江の竹林寺は潤州鶴林寺の事であつて江蘇省鎮江府の黃鶴山にある寺刹である。これに依つて常盤大定氏も同書、壽涯條に於てその現存を認めている如く、潤州黃鶴山に鶴林寺の存在することが窺見せられる。壽涯は此の潤州黃鶴山の鶴林寺に住持となつていたことが知られる。

次に濂溪年譜並に濂溪志に於ける廬山傳説であるが、度性善の記事に徴し隠者老浮圖を壽涯とすると壽涯は潤州以外廬山にも居住したる如くである。これに依つて濂溪が屢、廬山に赴いているからして、或は廬山に於て壽涯に會して教を受けたであらうとも推察せらる。毛西河は度性善の所謂「疑即壽涯」に就て「自必有據」と述べているが、然し度性善の説はその典據が曖昧であるから、他に正確なる資料の存しない限り壽涯の廬山居住説は疑問とすべきである。これに依つて濂溪が廬山に於て彼に邂逅したであらうと推察することは困難である。

次に景隆の尙直編に於ける太極圖の由來傳承に關しての所説を見るに

國一禪師以道學傳於壽涯禪師、涯傳麻衣、衣傳陳搏、搏傳種放、放傳穆修、修傳李挺之、李傳康節邵子、也、穆修又以所傳太極圖授於濂溪周子、已而周子扣問東林總禪師太極圖之深旨、東林爲之委曲割論、周子廣東林之語而爲太極圖說、周子長於禪學工夫、是以工夫之道過於邵子、云云（尙直編、卷下）

濂問太極圖之所由、總曰、竹林壽涯禪師得國一禪師之心傳、其來遠矣（同上）

かくの如く道學は國一禪師に依つて創始せられ、壽涯は此の國一禪師の心傳を相承して太極圖を作り、穆修が所傳の太極圖を濂溪に傳授したと述べている。これに依つて問題は尙直編に於ては壽涯が作爲したることとなる。

上掲の讀書志に於ける景迂の言に於ては、尙直編に於けるが如く壽涯が太極圖を作爲したとか傳授したとかの事は全く觸れていないが、唯濂溪の學師が壽涯であるとしてに過ぎない。尙直編に於ては壽涯を以て濂溪の直師として居らず、國一禪師の法嗣である壽涯から濂溪迄の傳承に就ては、麻衣、陳搏、种放、穆修の四道士を擧げている。此の點に於て讀書志と尙直編とはその所説に趣を異にしている。即ち、兩説を併せ考えると、茲に時代を異にしたる兩壽涯が存在することである。それは國一禪師の法嗣である唐の壽涯と濂溪の師である宋の壽涯とである。此の唐宋の兩壽涯に就ていづれが穩當であるか一應検討して見ることにする。

唐の壽涯の師である國一道欽禪師に關しての傳記は景德傳燈錄(卷四)、宋高僧傳(第九)、釋氏稽古略(卷三)等に記載されていて、その實在の人物であることは確實である。傳燈錄に據つてその傳記の一部を茲に引用すると次の如くである。

蘇州崑山人也、姓朱氏、初服<sub>ニ</sub>辟儒教、年二十八、玄素禪師遇之、因謂<sub>レ</sub>之曰、觀<sub>ニ</sub>子神氣溫粹、眞法寶也、師感悟、因求<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>弟子、素勃與<sub>ニ</sub>落髮、(省略)、唐大曆三年代宗詔至<sub>ニ</sub>闕下、親加<sub>ニ</sub>瞻禮、(省略)、帝悅、謂<sub>ニ</sub>忠國師<sub>一</sub>曰、欲<sub>レ</sub>錫<sub>ニ</sub>欽師一名、忠欽然奉<sub>レ</sub>詔、乃賜<sub>ニ</sub>號國一<sub>一</sub>焉、後辭<sub>ニ</sub>本山、於<sub>ニ</sub>貞元八年十二月<sub>一</sub>示寂、說<sub>レ</sub>法而逝、壽七十有九、勅諡曰<sub>ニ</sub>大覺禪師<sub>一</sub>、

即ち道欽禪師はその師潤州鶴林寺の玄素禪師(宋高僧傳、第九)で、唐大曆三年代宗より國一の號を賜い唐の徳宗貞元八年(西紀七九二)壽七十九を以て示寂している。徑山道欽傳には師が度する所の弟子、崇惠禪師、大祿山頽禪師、范陽杏山悟禪師、清陽廣敷禪師等を擧げているが、壽涯の名は載つていないし、傳燈錄並に高僧傳等を檢してもその傳記が存していない。察するに僧壽涯は著名な人物でなかつたためか、或は實在しない人物であつたためか、或はその他の理由で記載されなかつたことと思ふ。然し尙直編に於て景隆が太極圖の傳承に僧壽涯を特に重要視してその名を屢、擧げている點からすると、相當著名な人物であるから當然彼の傳記が傳燈錄か高僧傳等に、或はその名が國一禪

師傳にも載るべきであると考えられる。かゝる人物でありながら壽涯の傳記並に彼の名が傳燈錄並に高僧傳に記載されないことに疑問をいだくのである。恐らく實在する歴史的人物でなくて、架空的人物ではないかと考えられる。依つて唐の壽涯が國一禪師の法嗣であり道を國一より學んだとするのは虚説としか思われぬ。尙、壽涯が太祖圖を傳授したのは麻衣道者と伝えられているが、此の麻衣と唐の壽涯との年齢の關係からも検討してみよう。

壽涯が國一禪師の弟子で九十歳の長壽を以て示寂したと假定すると、その年は唐の懿宗咸通三年即ち西紀八六二年前後となる。麻衣は宗の太祖建隆元年（西紀九六〇）に太祖と問答している所からして、その時の年齢を九十歳と假定すると西紀八七〇年頃の生年となつて、麻衣の出世前に壽涯が歿したこととなる。尙、麻衣が壽涯示寂の時二十歳で彼より教を受け圖を傳授したとすると、麻衣の年齢は百二十歳前後となつて餘りにもその長壽はあり得ない。それで壽涯麻衣に於ける年齢の關係上、唐壽涯の實在は更に疑問である。以上壽涯の傳記並に年齢の二つの點からして、唐の壽涯は全く實在人物ではないとすべきである。尙直編の作者景隆が何故か架空的人物である唐壽涯を國一の法嗣としたか其の理由は明瞭でないが、とにかく該説に關する尙直編の説は疑問であつて信憑することは出来ない。

次に宋の壽涯即ち濂溪が師事したと謂れる壽涯に就て考察して見るに、傳燈錄、宋高僧傳、その他の史傳に徴しても唐の壽涯と同じく彼の名を見出すことは出来ない。壽涯が濂溪の師事したる名僧であつたとしたならば、史傳に彼の名だけでも載るべき筈である。然るにその名を逸している所からして考えるに、これ又、唐壽涯説の如く實在しない人物ではないかと疑うのである。唐宋兩壽涯説に對して疑問をいだいているが、唐壽涯説は既述したる如く時代的にも距りがあつて虚説としか考えられないが、然し宋壽涯説の方は否定的斷案を下すことは出来ない。寧ろ宋壽涯は史傳になくとも架空的人物でないと考えたい。常盤大定氏も「支那に於ける佛教と儒教道教」(二〇四頁)の壽涯條に於てこれを是認している。茲を以て濂溪の師を宋の壽涯であらうと推定して置く。これに就て常盤大定氏も同書に於てこれを認めて居り、尙、大江文城氏も「程朱哲學史論」(三一頁)に於て是認している所である。此の推定からして

既述の如く讀書志に記する潤州鶴林寺の僧壽涯は唐の壽涯でなくて宋の壽涯ということとなる。此の潤州鶴林寺の宋壽涯と濂溪との關係に就ては後に譲るから茲では省略して置く。濂溪の學師が宋の潤州鶴林寺僧壽涯であることが推定されたから、此の宋の壽涯が太極圖を作爲したか否かの問題に就て論を進めたい。

尙直編に於ける太極圖の傳承に就て論述したる所に於て既に掲げたる

國一禪師以道學傳於壽涯禪師。

濂問太極圖之所由、總曰、竹林壽涯禪師得國一禪師之心傳、其來遠矣。

に徴して見ると空谷景隆は太極圖を壽涯が創作したこととしてゐる様に窺見せらる。此の尙直編に於ける所謂壽涯は既に検討したる如くに唐の壽涯ということになるが、然し此の唐壽涯は實在しない架空的な人物とされたから、問題の太極圖の作爲並に濂溪の學師に就ては關係が無いと考えられる。依つて宋の壽涯に就ては讀書志に於ける景遷の所謂謂

胡武平周茂叔同師潤州鶴林寺僧壽涯

が當を得てゐるものであり、尙、此の景遷の言に依つて濂溪の學師であることが知られる。此の宋の壽涯が濂溪の學師であることは既に推定されたので問題で無いにしても、彼が太極圖を創作したか否かは甚だ疑問である。元來、太極圖は佛教的色彩が無く濃厚に道家的性質を帯びて居り、尙、最も信賴すべき穩當な説とされてゐる景遷の言に於て、全然太極圖のことに就ては觸れてゐない所から考察すると、壽涯作圖説は疑問で恐らく創作したとは考えられない。若も壽涯が作圖者であるならば、景遷は此の點強調したことと思われる。それで壽涯の作圖に就ては首肯することが困難である。かくの如く壽涯が太極圖の作者でないという推定がなされたので、次に考えられる問題はその圖説の作爲に就ての點であるが、壽涯が圖説を作爲したとは考えられないし、諸家總べて否定的態度を以て臨んでゐるから問題とはされない。それで毛西河の如く濂溪が太極圖を壽涯から傳授されたとする説は首肯され得ない。壽涯が

作圖者でも無く或は圖說作者でも無くなつたが、然し濂溪の學師であることが認められたことからして、濂溪の思想に直接或は間接にその佛教的否禪的な影響を與えたことに就ては無視することが出来ない。

次に圖並に圖說の問題に關係して、濂溪の太極圖說の作爲に就て少し考察してみようと思う。此の問題に關しては既に道士傳承説の項に於て觸れておいたのであるが、太極圖は道家者流の徒に依つて作られたと推定されたが、その圖說作者は陳搏か或は濂溪かであるとして置いた。陳搏濂溪兩説のいづれであるかはこれを確定することは困難である。太極圖が道家者流の手になつたとされたことから、當然圖說も道士輩によるものと推定されることになるので、此の點に於て陳搏説の方が穩當の様である。次に濂溪説の方を窺見するに、尙直編(卷下)に所謂

己而周子扣問東林總禪師太極圖之深旨、東林爲之委曲割論、周子廣東林之語、而爲太極圖說、

に徴して、東林常總禪師に所謂太極圖の深旨を問討し、その指導啓發を得て太極圖說を作つたとしている。此の尙直編並にその他諸家の見解によると、概ね濂溪を以て圖說作者としているから濂溪説が正しい様にも考えられる。兩説の見解に依ると各、首肯されて決定し難い。然し太極圖說なるものが元來太極陰陽五行の儒教的思想と無極無欲の老莊の思想とからなつていて、佛教的な色彩が乏しい所から考えると、曖昧ではあるが既に推定したる如くに、道家者流か儒家者流か即ち陳搏か濂溪かの作爲と思われる。荻原擴氏は「周濂溪の哲學」(自二二九至二三〇)に於て圖及び圖說は他人よりの傳承であつて濂溪の自作ではないと結論しているが、その太極圖の濂溪自作で無いことは既述した如くであるが、その圖說は濂溪の作爲ではないとすることは小生の見解と異にしている。佛者傳承説に於ては主として僧壽涯に就て佛者説その他の問題を検討してきたのであるが、壽涯が太極圖の作者でも無く、又その傳授者でもないと推定された。圖說の思想的内容からして佛教的な色彩を缺いているので、佛者の圖說作爲説は考えられない。依つて僧壽涯が圖說作者であるかも知れぬという推定を認めることは出来ないと思われる。それで宋壽涯は圖並に圖說の作者では無くなつたが、然し濂溪の學師である以上濂溪との交渉關係を認めなければならぬ。

以上太極圖の作傳に就て周子獨創說、道士傳承說、佛者傳承說の三說を検討してきた所で明瞭である如く太極圖の濂溪創作說並に壽涯作傳說は首肯することは出来ない。要するに太極圖は道家者流の作爲に依るもので、恐らくその作者は道士陳搏ではなからうかと推定して置いた。尙、太極圖說の作者に就ては陳搏か或は濂溪かであらうと思われ。佛者傳承說の項に於て論述したる如くに、宋の壽涯は圖並に圖說の作者では無いにしても、その作傳途上に禪的な啓迪指導と琢磨拂拭とを受けていると考えられるし、尙、壽涯が濂溪の學師である所から濂溪の受けた禪的影響も決して無視することは出来ないから、濂溪を中心とした宋學の源流に醗酵された禪的氛圍氣のあることは認めねばならぬ。

## (11)

前節に於て主として太極圖並に太極圖說の作傳に就て論述したのであるが、特にその傳承に於て佛禪的な影響のあつたであらうこと、尙宋壽涯の濂溪に及ぼした禪的影響の鮮少で無かつたことを述べておいた。次に論述しなければならぬ課題は主として濂溪と禪との關係であるが、濂溪と交渉のあつたとされる壽涯等の禪僧に就てその關係を論述しようとするものである。これに依つて濂溪の禪的氛圍氣とその影響並に宋學の源流に於ける禪的環境とを窺見しようと思う。

濂溪と交渉のあつた禪僧中、彼の學師である潤州鶴林寺の宋壽涯に就ては既に指摘した所で、これに就ては晁公武の讀書志を始めとして度性善の濂溪年譜、濂溪志、馬端臨の文獻通考、郝敬の時習新知、朱彝尊の經義考、陳建の學菴通辨、等に記されている。壽涯以外交遊のあつた禪僧に就ては居士分燈錄、尹氏家塾記、性學指要、佛祖綱目、等に記載されている所で朱時恩の居士分燈錄に於ては

頤管嘆曰、吾此妙心實啓<sub>ニ</sub>迺於黃龍、發<sub>ニ</sub>明於佛印、然易<sub>ニ</sub>廓達、自<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>東林開遮拂拭、無<sub>ニ</sub>絲<sub>ニ</sub>表裏洞然、(省略)贊

曰、濂溪開伊洛之傳、而考其淵源、實自佛印黃龍點破、所著太極亦得之東林、(周敦頤條)

初見晦堂心、問教外別傳之旨、(省略)、又扣東林總禪師、(同上)

とあり、尙、覺隱本誠の性學指要には次の如く記している。

濂諭<sub>ニ</sub>學者<sub>一</sub>曰、吾此妙心實得<sub>ニ</sub>啓迪於南老<sub>一</sub>、發<sub>ニ</sub>明於佛印<sub>一</sub>、易道義理廓達之說、若不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>東林開遮拂拭<sub>一</sub>、斷不能<sub>ニ</sub>表  
裸洞然該貫弘博<sub>一</sub>矣。(尙直綱、卷下引用)

即ちこれ等に徴して鶴林壽涯の外に黃龍慧南禪師、佛印了元禪師、東林常總禪師、晦堂祖心禪師のあることが知られる。濂溪は此の五禪師に歴遊參禪して禪的啓迪指導とその鉗錘琢磨とを受けて、彼の性格と思想とは更に禪的な色彩を帯びるに至つたものと謂うべきである。大定氏は「支那に於ける佛教と儒教道教」(二〇四頁、二〇五頁)に於て、濂溪の交遊年齡迄記して五禪師との交遊を是認しているが、然し荻原氏は「周濂溪の哲學」(特に一八六頁—一八八頁)に於ける宋の壽涯と三禪師の項に於て、宋壽涯を架空的人物とし濂溪の壽涯從學説を否定して居り、尙、濂溪と慧南、了元、常總、(祖心は擧げていない)との交遊を疑問としているが、「濂溪が浮屠若しくは居士と全然交渉を有たなかつたと云ふ意味ではなくして」の語はこれを肯定している態度であると謂うべきである。以下項を分けて五禪師と濂溪との略傳を對照して周子の學禪の状態を窺見しようと思う。鶴林寺壽涯に就ては佛者傳承説の項に於て既に論述したる所であるから、主として既述以外の事項に就て論述していくことにする。

#### A 鶴林壽涯

壽涯に就ての史傳を記載する資料は唯、讀書志並に濂溪志に於ける「潤州鶴林寺僧壽涯」があるのみで、殆んど全く存していないから彼の詳傳は不明である。既に佛者傳承説の項に於て壽涯が潤州鎮江府黃鶴山鶴林寺の住持であり濂溪の學師であることを推定しておいた。

濂溪の傳記を按ずるに少くして父輔成を失つたので、齡十五の時母鄭氏と俱に道州の營道縣から京師に赴き、母の

父龍圖閣學士鄒向に養育されていたが、景祐三年鄒向の奏言に依つて彼二十歳の時初めて將作監主簿に補試せられ、後三年を経て洪州分寧縣の主簿となり、即ち年二十四歳の時初めて仕官し今の江西省南昌の地に赴任している。龍圖公鄭氏及び母仙居縣太君の墓が潤州丹徒縣にある所から推測するに、彼が龍圖公の家へ赴いてから以後に於て、鄭氏は潤州丹徒縣の近くの黃鶴山に住居を移したのではないかと思われる。これに依つて察するに濂溪は鶴林寺の黃鶴山附近を來往することが少くなかつたと考えられる。彼十五歳から仕官の二十四歳迄約十ヶ年の間に於て、黃鶴山の鶴林寺を訪れ壽涯と邂逅して參禪の機會を得たものと思われる。彼が壽涯を師として禪を學修したことに就ては讀書志（異景迂の言）に於ける

胡武平周茂叔同師潤州鶴林寺僧壽涯。（文獻通考及び經義考にも記載）  
並に宋元學案（卷一二）に於ける

周子與胡宿邵古、同事潤州一浮圖、而得其易書、

或は濂溪志に於ける

先生嘗至潤州、與濂溪遊、或謂、濂溪與先生同師潤州鶴林寺僧壽涯、或謂、邵康節之父邂逅先生於廬山、從隱者老浮屠遊、遂自受易書、（宋元學案、卷一二）

に徴して窺知することが出来る

濂溪が潤州に留在したことに就ては彼の傳記に依ると既述の十五歳から仕官の二十四歳迄の間と母仙居縣太君を改葬した彼五十四歳以降とである。後者に就て考察するに讀書志並に宋元學案等に依ると、蓋し濂溪は胡宿邵古と俱に壽涯に師事したことになつてゐる。それで濂溪が若し五十四歳以後に於て壽涯に従學したとすると邵古は八十餘歳（周子五十四歳の時、邵古子の康節六十一歳であるから、その父邵古は少くとも八十餘歳以上と考えられる）と推定されるから、その老齡を以て周子と俱に壽涯に師事したとは思われぬ。尙、讀書志、文獻通考、經義考等に依ると

濂溪はその學を壽涯から受けて兩程子に傳授したとしてゐるが、明道伊川兩子が濂溪に師事したのは彼三十歳以後の數年間であるから、周子の壽涯に師事したのは三十歳以前とならなければならぬ。それで濂溪が五十四歳以後に於て壽涯に師事したとすればそこに矛盾が生じてくることとなる。以上二點に就ての考察からすると五十四歳以後壽涯に從學したことは首肯出來ないから澗州に於ける壽涯從學説は前者即ち十五歳以降二十四歳頃迄の約十ヶ年の間のこととなる。常盤氏も前掲同書の壽涯條に於て二十四歳以前説を是認してゐる。

僧壽涯に師事したる者に就ては讀書志並に濂溪志（一説）に於ては周濂溪と胡武平となつて居り、濂溪志の他の説（老浮屠になつてゐるが僧壽涯と解したい）に於ては胡宿と邵古となつて居り、宋元學案（澗州の一浮屠になつてゐるがこれも僧壽涯と解したい）に於ては濂溪と胡宿邵古となつてゐる。邵古の從學に就ては上述の如く疑問であつて肯定することは出來ないが、又、胡宿の壽涯從學に就ても讀書志並に濂溪志の所説が最も古いからして一應首肯される様であるが疑問である。然し胡武平は濂溪と親交の一人であつた關係上、周胡の交遊に就ては疑問の餘地は無いからして兩志の所説を信じてよい。胡武平は濂溪より二十一歳年長で宋太宗至道二年（西紀九九六）に生れ英宗治平四年（西紀一〇六七）に歿してゐるが、彼の略傳は宋史本傳の外、宋元學案（卷一二）並に佛祖統紀（第二二）にも記載されてゐる。統紀に依つて窺うと次の如くである。

胡宿字武平、常州晉陵人、學問文章、當世推重、由樞密副使、出鎮杭州、每來謁岳師、諮詢妙道、躬執弟子禮、師安坐、不<sub>レ</sub>少遜、

此の略傳に所謂岳師とは淨覺仁岳禪師であつて仁岳の傳は佛祖統紀（第二二）並に釋氏稽古略（卷四）に載つてゐるが、それによると英宗治平元年示寂で禪門樞要、楞嚴經集解、楞嚴文句、金剛般若疏、熏聞記、等を著作してゐるが統紀に所謂「師於楞嚴用<sub>レ</sub>憲尤至」に徴して如何に楞嚴に專念したるかゞ窺われるし、尙、統紀に依ると仁覺は老齡のため還郷したが、武平は岳のため上奏して淨覺の號を賜うたことが知られる。武平は仁岳の著書に序文を書いて

いるが該序は次の如くである

宮中千燈、多光互入、堂下六樂、正聲相宣、鼓吹妙經、漢火圓教、法施豈方法哉、(釋氏稽古略、卷四)

これに依つて窺見するに武平は仁覺を師としたる禪門の徒で楞嚴、金剛、華嚴、圓覺、等と學修したと思われる。濂溪は武平と親交の友であるから、その胡宿並に仁覺の禪的感化を受けたであらうと察せられる。上掲の武平の序文は釋氏稽古略に於て慶曆元年條にあるから、此の年が濂溪の二十五歳に相當するので、胡周の交遊は蓋しそれ以後と推定せられる。胡宿は仁覺に師事したのであるから、壽涯從學説は疑問でもあるが、然し讀書志及び濂溪志の説を全く否定することが出来ないから一應是認して置くこととする。

既に論述したる所に徴して濂溪が壽涯に師事して禪を修得したことに就ては首肯せられると思う。彼が壽涯より如何なるものを受け得たかを宋元學案(卷一二)に據つて窺うと次の如くである。

周子又得天地之偁于壽涯。

晁子曰、元公師事鶴林寺僧壽涯、而得<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>物先<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>形本寂寥能爲<sub>二</sub>萬象主<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>逐<sub>二</sub>四時<sub>一</sub>、淵<sub>レ</sub>之偁。

周子與<sub>二</sub>胡宿邵古<sub>一</sub>、同事<sub>二</sub>濶州一浮屠<sub>一</sub>、而傳<sub>二</sub>其易書<sub>一</sub>。邵康節之父避<sub>二</sub>近先生于廬山<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>隱者老浮屠<sub>一</sub>、遂同受<sub>二</sub>易書<sub>一</sub>。即ち宋之學案に於ては濂溪は壽涯より天地の偁及び易書を傳授されたとしてゐることが知られる。これに就て考察するに壽涯が天地の偁及び易書を濂溪に傳授したとするならば、壽涯は誰よりそれを傳授されたかが問題であるが、確たる資料が存しない限り知ることは不可能である。尙、壽涯が道儒の徒であるならばかゝる傳授は首肯され得るとしても、彼が禪僧である限りかゝる道儒の書を傳授したとするには疑問である。彼が何かを傳授したとすれば、佛禪に關するものであつたに相違ない。壽涯が天地の偁並に易書を濂溪に傳授したことに就ては全然否定するものではないが、かゝる意味に於て宋元學案の説は首肯することは出来ない。

既述したる如く壽涯は太極圖並に圖說の作傳者ではないが、然し作傳途上に何等かの形式に於て間接的に禪的な啓

眞宗天禧元年  
西紀一〇一七年

十五歳

二十四歳 南昌赴任

此の間屢、鶴林寺に赴き壽涯に師事

五十七歳

神宗熙寧六年  
西紀一〇七三年

五十四歳以降に於ける壽涯從學説は疑問

廸と拂拭を與えたであらうと思われる。讀書志に於てはただ、壽涯を濂溪の學師としていて、太極圖は勿論天地偁及び易書等に就ては全く觸れていないが、景迂の言は穩當なものと考ええる。壽涯と濂溪との交渉邂逅を認める以上濂溪は壽涯より禪を學修しその禪的影響を受けたことは否定することは出来ないと思われる。尙、仁覺禪師に師事したる親友胡武平は禪門の徒である關係上、その禪的感化のあつたことも否定することは出来ない。壽涯從學に就て表示すれば上圖の如くである。

B 黃龍慧南

慧南傳に依ると彼は臨濟宗黃龍派の祖で眞宗咸平五年（西紀一〇〇三）信州玉山に生れ、姓は章氏、幼にして深沈、既に大人の相があり、十一歳の時發心して懷玉定水院智鑾に就て出家し、十九歳にして具足戒を受け歸宗寺に遊ぶ。三角山の懷澄に參じ、尋で澄に隨つて泐潭に赴きて第一座となる。その後、石霜楚圓の膝下に侍り趙州勘婆によつて省悟す。時に年三十五。それより以後、諸山を歴叩し、黃檗の積翠に退居し尋いで寧州隆興府（江西省南昌府）の黃龍山に還りて盛に宗風を振起したが、神宗の熙寧二年（西紀一〇六九）三月十七日遷化。世壽六十八。普覺禪師と追諡せられ、その嗣法に晦堂祖心、寶峯克文、等八十餘人ありと謂われている。

以上は慧南の略傳であるが、慧南と濂溪との年齢を比較すると慧南は眞宗咸平五年(西紀一〇〇二)に生れ、濂溪は眞宗天禧元年(西紀一〇一七)に生れているから、慧南の方が濂溪より十五歳年長であることが知られる。雲峰文悅、黃龍慧南、晦堂祖心の三傳に依ると、祖心は二十一歳にして龍山寺惠全に就て得度し、次で雲峰文悅に留在すること三年、慧南に四年隨從し、辭して後再び文悅に歸從せし間に文悅の寂に會うている。(佛祖通載、卷二九、祖心傳條)文悅は宋の仁宗嘉祐七年(西紀一〇六二)七月八日六十六歳を以て寂している。祖心は元符三年(西紀一一〇〇)十一月十六日七十六歳で世を去つてゐるから、逆算すると文悅の歿年は祖心の三十八歳の時に當り、祖心が出家してから約十八年に相當している。祖心が慧南に隨從した年を推定するに際して、假りに文悅より慧南に轉從したる時をその中間とするならば、祖心の三十歳頃であつて仁宗の至和元年前後となる。これから考えると慧南は至和元年(西紀一〇五四)五十三歳頃には黃檗即ち江西省南昌府に在住しているとすべきである。年譜によると濂溪が洪州南昌の知縣になつて赴任したのは至和元年三十八歳で嘉祐元年迄約そ三年間の留在で、慧南の五十三歳から五十五歳迄の期間であるが、慧南が南昌に赴くと間もなく濂溪が南昌に赴任してゐるのである。それで慧南と濂溪とが俱に南昌に留在したのは濂溪在任の三年間で、その期間に於て兩者の交遊がなされたと推定される。濂溪は既に僧壽涯に參じて禪心禪味を有していたから、知縣として南昌に在任中、當時名聲のあつた黃龍慧南を黃檗に拜芝して禪を修學したことは當然のこと、首肯せられる。依つて濂溪が慧南より受けたる禪的感化と影響とは無視することが出来ないと思われる。茲を以て居士分燈錄には周子の言として

頤管嘆曰、吾此妙心實得<sub>二</sub>啓迪於黃龍。(周敦頤條)

を載せ、尙、同錄の贊には次の如く記してゐる。

宋學の源流に於ける禪的環流

贊曰、濂溪開伊洛之傳、而考其淵源、實自佛印黃龍點破、云云

これに徴して濂溪が慧南より受けたる禪的影響の如何に顯著であつたかを窺見することが出来る。上述の如く濂溪が慧南に參禪したのは南昌であるが、然し次の理由に依つて南昌以外の地に於ては兩者の邂逅は無いものと推定せられる。即ち佛祖通載、五燈會元、釋氏稽古略等に徴して慧南は後に黃龍に轉住しているが、南昌以外に赴いた跡がないこと、周子年譜等に依つて濂溪は嘉祐元年十一月合州に轉任以來再度南昌に來訪しなかつたこと、の二つの理由に據つて推定することが出来る。濂溪が慧南と交遊し彼に參禪したのは既述の如く南昌の地であるとされたが、その間は濂溪が知縣として南昌に赴任以後約そ三年間であると推定した。

次に濂溪の墓誌を撰した親友潘興嗣を通して濂溪と慧南との關係を窺つてみたい。潘興嗣に就て居士分燈錄には「潘興嗣黃龍慧南禪師法嗣」と題し次の如く記している。

潘興嗣字延之南州人、初調德化縣尉、同郡許域始拜江州守、嗣往見之、域不爲禮、遂懷刺歸、意不之官、問道於慧南、獲其印可、嘗曰、我清世之逸民、故自號清逸居士、當是時、黃龍法道大振、竭蹶、後、云云、

(潘興嗣條)

此の後に南老との問答が記されているが、續傳燈錄、卷七、南禪師條にも記載されている。居士分燈錄の記事に徴して、潘興嗣は黃龍慧南の法嗣で發心して早くより慧南に參禪辯道して禪の要諦を究明しその印可を得て自ら清逸居士と稱していた。慧南より受けたる潘興嗣の禪的な思想と性格とが、親交の深かつた濂溪に感化影響を與えずには措かなかつたことは推察するに難くない。換言するならば此の潘興嗣を通して慧南の禪が濂溪に影響を及していることは當然とすべきである。濂溪は直接慧南に參禪して禪要を體得しており、間接的にも潘興嗣からその慧南の禪的感化を受けている。かく濂溪は直接的にも或は間接的にも慧南との關係が深かつたとすべきである。次に慧南と濂溪との傳記に徴して兩者の會見期間を表記すれば次の如くである。

(黃龍慧南)

眞宗咸平五年  
西紀一〇〇二生

三十五歲

石霜の下で省悟

←叩歴山諸→

五十三歲

五十五歲

南昌會見

六十八歲

神宗熙寧二年  
西紀一〇六九  
黃龍山に於て寂

(周濂溪)

西紀一〇一七生

二十歲

三十八歲

南昌赴任

四十歲

十一月  
合州赴任

五十七歲歿

〇 佛印了元

佛印了元姓は林氏、字は覺老、饒州浮梁の人、世々儒を業とし、二歳にして琅々として論語及び諸家の詩を誦し、五歳にして三千首を讀誦し、長じて五經の大義に通達した。或時竹林寺に詣りて首楞嚴經を誦し、省察する所ありて遂に儒學を棄て佛門に入り、後廬山に遊び開先の遠道に謁した。時に齡十九。次で圓通訥公に隨從したが、訥公は德望の高い了元を推して江州承天に住せしめ、齡二十八の時開先の法を嗣がしめた。その後承天から准の斗方、廬山の開先、歸宗、潤の金山、焦山、江西の大江等に歴住し最後に雲居に住した。承天から雲居に住する迄その間

約そ四十年。彼の德は縉素を化し法は縉紳賢者に及んだと謂われる。哲宗元符元年(西紀一〇九八)正月四日雲居山に於て遷化、世壽六十九、坐夏五十二歲。

(佛祖通載、卷二九、釋氏稽古略、卷四、續傳燈錄、卷五、八十八祖道影傳贊、卷四)

主として佛祖通載に徴して佛印の略歴を窺見したのであるが、彼は二十八歳の時承天に住して開先の法を嗣いでから斗方、開先、歸宗、金山、焦山、大江、雲居、等を歴住し遷化する迄、その間約そ四十年間であつた。彼の廬山に留の期間を推定するに際して、彼が廬山の歸宗から潤の金山に轉住したる時期に就て考察して見るに佛祖通載には東坡謫黃州、廬山對岸、元居歸宗、酬酢妙句、與烟雲爭麗、及其在金山、東坡釋還東吳矣。

(卷二九佛印了元條)

とあり、尙、居士分燈錄には

元豐三年謫黃州、時佛印了元住歸宗、軾與酬酢妙句、烟雲爭麗、自黃徒汝、因遊廬山、宿東林、與照覺常總論無情話、有省。(卷下、蘇軾條)

と記してある。これに徴して佛印と蘇軾との交遊關係を窺うことが出来るが、蘇軾が黃州に流謫せられたのは元豐三年(西紀一〇八〇)で同七年には汝州に赴いてゐる。蘇軾の黃州に謫された元豐三年頃は尙佛印は廬山の歸宗に住しているが、佛印が潤の金山に轉住している頃には東坡は既に汝州に歸還している。それで佛祖通載等に於ける歴住の順序を信するならば、佛印は承天に住して開先の法を嗣いだ二十八歳から蘇軾の黃州流謫の元豐三年即ち五十一歳頃迄は廬山に留をしたものとすべきである。これを濂溪の年齢に就て見るに、佛印二十八歳の時は濂溪四十三歳(西紀一〇五九)に當るからして、佛印は濂溪の四十三歳の頃からその没後六年頃迄約そ二十年間の廬山に留である。濂溪と佛印とは如何なる交渉關係があつたかに就て窺見しようとするのであるが、上述の濂溪が佛印に交渉した年齢に就ても大略推定を試みたい。即ち雲臥紀談、居士分燈錄、佛法金湯篇、等に徴して兩者の交遊關係を窮うと次の如くである。

春陵有水曰濂、周公茂叔先世所居、既樂廬山之幽勝、而築室則以濂名其谿、蓋識不忘本矣、于時佛印禪

師元公寓<sub>二</sub>鸞谿之上<sub>一</sub>、相與講道爲<sub>二</sub>方外友<sub>一</sub>、由<sub>二</sub>是命<sub>三</sub>佛印<sub>一</sub>作<sub>三</sub>青松社主<sub>一</sub>、追<sub>二</sub>熈白蓮故事<sub>一</sub>、嘉祐中、公通<sub>二</sub>守瀨上<sub>一</sub>、尋有<sub>二</sub>潛<sub>三</sub>公於部使者<sub>一</sub>、臨<sub>二</sub>之甚威<sub>一</sub>、公處<sub>二</sub>之超然<sub>一</sub>、佛印聞而述<sub>二</sub>廬山移文<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>之曰<sub>一</sub>、仕路風波盡可<sub>二</sub>驚<sub>一</sub>、唯君心地坦然平、未<sub>二</sub>談<sub>三</sub>世利<sub>一</sub>眉先<sub>二</sub>皺<sub>一</sub>、纔<sub>二</sub>顧<sub>三</sub>雲山<sub>一</sub>眼便<sub>二</sub>明<sub>一</sub>、湖宅近分<sub>二</sub>堤柳色<sub>一</sub>、田齋新占<sub>二</sub>石谿聲<sub>一</sub>、青松已約爲<sub>二</sub>禪社<sub>一</sub>、莫<sub>二</sub>遣<sub>三</sub>歸時<sub>一</sub>白髮生<sub>二</sub>、公未<sub>二</sub>歸間<sub>一</sub>、復<sub>二</sub>趣<sub>三</sub>之曰<sub>一</sub>、常思湖口網繆別、又憶匡廬爛漫遊、兩地山川頻在<sub>二</sub>目<sub>一</sub>、十年風月澹經<sub>二</sub>秋<sub>一</sub>、仙家丹藥誰能致、佛國乾坤自可<sub>二</sub>休<sub>一</sub>、況有<sub>二</sub>天地蓮社約<sub>一</sub>、何時携<sub>二</sub>手話<sub>三</sub>峰頭<sub>一</sub>、公雖<sub>二</sub>爲<sub>三</sub>窮理之學<sub>一</sub>、而推<sub>二</sub>佛印<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>社主<sub>一</sub>、苟道之不<sub>二</sub>同豈能相與爲<sub>三</sub>謀耶<sub>一</sub>。(雲臥紀談、上)

周敦頤字茂叔、春陵人、(省略)因遊<sub>二</sub>廬山<sub>一</sub>、樂<sub>二</sub>其幽勝<sub>一</sub>、遂築<sub>二</sub>室焉<sub>一</sub>、時佛印了元寓<sub>二</sub>鸞谿<sub>一</sub>、頤謁<sub>二</sub>之<sub>一</sub>、相與講道、問曰、天命之謂<sub>二</sub>性<sub>一</sub>、率<sub>二</sub>性之謂<sub>二</sub>道<sub>一</sub>、禪門何謂<sub>二</sub>無心是道<sub>一</sub>、元曰疑則別參、頤曰參則不<sub>二</sub>無<sub>一</sub>、畢竟以<sub>二</sub>何爲<sub>三</sub>道<sub>一</sub>、元曰、滿目青山一<sub>二</sub>任看<sub>一</sub>、頤豁然有<sub>二</sub>省<sub>一</sub>、一日忽見<sub>二</sub>窓前草生<sub>一</sub>、乃曰、與<sub>二</sub>自家意思<sub>一</sub>一般、以<sub>二</sub>偈呈<sub>三</sub>元曰<sub>一</sub>、昔本不<sub>二</sub>迷<sub>一</sub>、今不<sub>二</sub>悟<sub>一</sub>、心融境會豁<sub>二</sub>幽潛<sub>一</sub>、草深窓外松當<sub>二</sub>道<sub>一</sub>、盡日令<sub>二</sub>人看不<sub>三</sub>厭<sub>一</sub>、遂請<sub>二</sub>元<sub>一</sub>作<sub>二</sub>青松社主<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>熈白蓮故事<sub>一</sub>。

(居士分燈錄、周敦頤傳。尙、佛法金湯篇、卷一二にも記載)

雲臥紀談に所謂嘉祐中公通守瀨上を周子年譜に徴するに

嘉祐六年先生時年四十五選<sub>二</sub>國司<sub>一</sub>、通<sub>二</sub>判虔州<sub>一</sub>(贛州)。

とある如く贛州の通判となつたのは嘉祐六年である。雲臥紀談の文を推考すると嘉祐六年即ち四十五歳以前から深交のあつたものと思われる。それで濂溪四十五歳前後に亘る期間佛印との交渉がなされたものとすべきである。尙、濂溪が廬山に退嬰した五十四歳以後五十七歳迄、即ち佛印の四十歳から四十三歳迄の間廬山に於て會見されたと思われる。上述の如く佛印二十八歳から四十三歳迄の約十五年間と推定したが、要するに此の前後二回に亘り兩者の會見交遊が推定されるが前説より後説の方がより確實性がある。

上掲の資料に依つて兩者に於ける交遊關係の如何に深厚であつたかが窺われる。濂溪と佛印とは廬山の鸞谿に會し

互に禪要を語り性理の學を論じ方外の友となつたが、濂溪は佛印を以つて青松社主となした程である。濂溪は禪門何謂「無心是道」と發問したるに對して、佛印は疑則別參と實參實究底の禪的體驗を要することを諭している。佛印の所謂滿目青山一任看によつて疑團水解し遂に省察したのであるが、窓前の草生を眺めて遂に所謂與自家意志一般なる禪的心境となつて現われたのである。濂溪が更に省悟の心境を偈に述べて佛印に提示して曰く

昔本不迷、今不悟、心融境會豁幽潛、草深窓外松當道、盡日令人看不厭。(居士分燈錄、周敦頤條)

と。佛印は此の偈に和して次の如く提唱している。

大道體寬無不在、何拘動植與蟲潛、行觀坐看了無礙、色見聲求心自厭。(佛法金湯綱、卷一二、周子條)

濂溪の偈に依つて心境融通したる一如の心境が親われるが、これ彼の道の體認によるものと謂うべきである。かくの如き彼の省悟の心境は佛印の啓迪指導による禪的影響に依るものである。茲を以て居士分燈錄には濂溪の語として

吾此妙心實啓<sup>ニ</sup>迪於黃龍<sup>一</sup>發<sup>ニ</sup>明於佛印<sup>一</sup>。

と記している所以である。濂溪と佛印との交渉に就て論述したのであるが、兩者に親密な交遊がなされ濂溪は佛印に依つて啓發され省悟する所多大であつたと謂うべきである。兩者の交渉を表記すれば次頁の如くである。

#### D 晦堂祖心

黃龍寶覺諱は祖心、南雄始興の人。晩年黃龍に住したるを以て黃龍祖心とも稱す。年十九にして病のため盲となる。龍山寺沙門惠全に師事し出家して雲峰の文悅に隨従すること三年。悅を去つて黃檗の慧南に赴き留在ること四年。更に辭して再び雲峰の文悅に歸從したが悦公入寂。後京師に遊び國門の外に結庵して居住。祖心廬山に遊ぶこと前後二回。佛印了元の遷化後二年哲宗の元符三年(西紀一一〇〇)十一月六日黃龍山に於て寂す。閱世七十有六。坐夏五十二歲。(佛祖通載、卷二九、祖心條。釋氏稽古略、卷四)

(佛印了元)  
仁宗明道二年  
西紀一〇三二生

十九歳 開先遯道に謁す

二十八歳 開先の法を嗣ぎ  
承天寺に住す

四十歳

四十三歳

五十歳

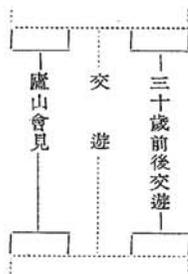
六十九歳

哲宗元符元年  
西紀一〇九八  
雲居山に於て寂

此の間斗方開先歸宗金山焦山大江各刹に歴住 ←

廬山に住約十二年間 ←

宋學の源流に於ける禪的環境



(周濂溪)  
十六歳

三十四歳

四十三歳

五十四歳

五十七歳

西紀一〇七三歿

廬山退嬰

祖心は元符三年七十六歳を

以て示寂したのであるから、

生誕は仁宗の天聖二年即ち西

紀一〇二五に當るので濂溪

(天禧元年、西紀一〇一七生)よ

り八歳年少である。祖心と濂

溪との會見に就て窺見しよう

とするのであるが、兩者の傳

記を對照すると、その邂逅の

機會は祖心が廬山に赴きし時

と黃龍の南老に隨從したる時

とがあると思われる。此の兩

者の會見交渉に就て以下論述

を試み推定を下したい。

廬山に於ける會見に就てで

あるが、濂溪は熙寧六年五十

七歳を以て世を去つてゐるが、

これは祖心四十九歳の時に相

當しているから、會見がなさ

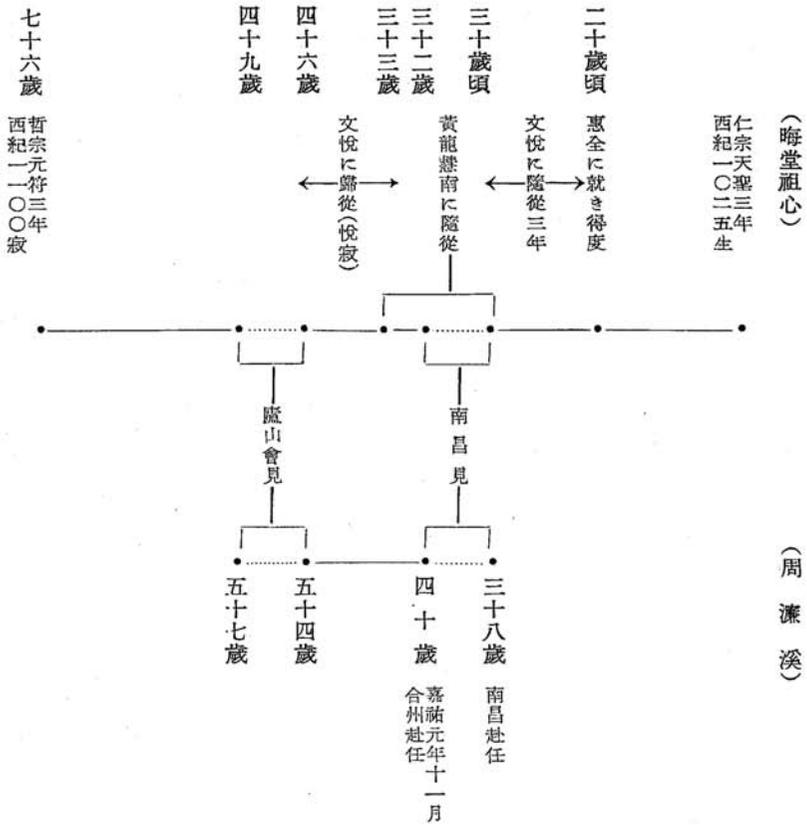
れたとすれば祖心の四十九歳迄に邂逅がなされなければならぬ。祖心が廬山に遊歴したのは黄檗を去つた以後であるから、祖心四十五歳以後の事であつて濂溪の五十三歳以後となる。濂溪は五十四歳以後廬山に在留しているからして、歿年の五十七歳頃迄に於ける數年間、廬山に於て祖心との會見がなされたものと推定したい。

次は第二の會見として考えられる黄龍慧南隨從に於ける機會である。祖心は最初龍山の惠全に師事し、以後雲峰の文悅に三年、黄檗の慧南に四年各、隨從し、再び文悅に歸從したる時悅公示寂したのである。黄龍慧南の項に於て既に推定した所に依つて知られるが如く、祖心が文悅から慧南に轉從したのは至和元年頃で祖心三十歳頃となる。爾來祖心は約そ四年間南昌黄檗の慧南に隨從している。濂溪も至和元年三十八歳にして南昌に赴任してから任地に留在すること約そ三年で、その間慧南と交遊し參禪していることは既に慧南の項に於て論述した所である。それで祖心と濂溪とは共に黄檗の慧南に隨從して修禪していたとすべきで兩者從學の期間は約そ三年間と推定して置く。其の間に於て濂溪は祖心と屢、會見している筈で、從つて濂溪は慧南に就ては勿論祖心にも從學して禪要を得ていとすべきである。祖心は慧南門下の高足であるからして師家に代つて接化した機會はあり得べきことで、次に引用する濂溪が祖心に教外別傳の禪旨を問うたとする居士分燈錄の記事も首肯せられる。濂溪が祖心に參禪して教外別傳の旨を尋問したる時に祖心が、懇諭しているが、これに就て居士分燈錄には次の如く載せている。

周敦頤字茂叔、春陵人、初見<sub>レ</sub>晦堂心、問<sub>二</sub>教外別傳之旨<sub>一</sub>、心諭<sub>レ</sub>之曰、只須<sub>テ</sub>向<sub>二</sub>爾自家屋裏<sub>一</sub>打點<sub>レ</sub>、孔子謂朝聞<sub>レ</sub>道夕死可矣、畢竟以<sub>レ</sub>何爲<sub>レ</sub>運、夕死可耶、顔子不<sub>レ</sub>改<sub>二</sub>其樂<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>樂何事、但於<sub>レ</sub>此究竟久久自然有<sub>二</sub>箇契合處<sub>一</sub>。(周子條) 要するに上論に徴して濂溪は南昌に於て慧南の會下祖心に參禪問道して居り、尙晚年廬山に於ても再會しているとすべきであるから兩者の交渉は認むべきと考へる。上論に徴して兩者の交遊會見を表記すると次頁の如くである。

#### Ⅱ 東林常總

東林常總姓は施氏、劍州尤溪に生る。十一歳の時寶雲寺の文兆法師に依つて出家し、建州大中寺の契恩律師に詣りて



(晦堂祖心)

(周濂溪)

宋學の源流に於ける禪的環流

受具。吉州禾山の禪智材公に隨從。其後黃龍慧南に道を聞きて歸宗に詣る。爾來慧南に隨從して石門の南塔、黃檗の積翠を経て黃龍に遷る迄その間二十年を閲した。慧南の寂後洪州太守榮公修の拜請に依つて泂潭に住したが、元豐三年江州東林の律居が改められて禪院となるに際し詔により茲に轉住。其後再び詔を受けて相國の智海禪院に住し元祐三年照覺禪師の號を賜う。元祐六年(西紀一〇九一)九月二十五日寂。世壽六十七、坐夏四十九。

(佛祖通載、卷二八、常總條。續傳燈錄、卷一六。釋氏稽古略、卷四。)

此の常總傳に依ると彼は哲宗元祐六年六十七歳で示寂しているから、逆算するとその生年は仁宗天聖三年（西紀一〇二五）となる。その間約そ二十年間を閑したとあるのは、慧南の會下に參じてからその寂年迄隨從していた期間と考えられる。それで慧南の歿した熙寧二年（西紀一〇六九）が常總の四十五歳に相當するからして、彼の二十六歳頃（西紀一〇五〇）から隨從したことになる。祖心は至和元年頃から約そ四ヶ年南昌に於て慧南に隨從したのであるが、常總も同じく南昌にありて慧南に從つていたのである。濂溪が至和元年南昌知縣として赴任してから嘉祐元年十一月合州に轉住する迄約そ三年間南昌に留在して祖心及び常總と共に慧南に參じていた。それで濂溪は南昌に留約そ三ヶ年間常總と屢々交渉の機會があつたものとすべきである。濂溪の南昌に赴いた至和元年三十八歳（西紀一〇五四）から嘉祐元年四十歳（西紀一〇五六）迄を常總の年齢に對照すると、三十歳から三十二歳迄に相當しているからその間に於て濂溪と邂逅したことになる。以上は南昌に於ける濂溪と常總との交渉に就て窺見したのであるがこれは認むべきと考えられる。濂溪は南昌を去つて合州（重慶）に赴任以後歿年迄に於て常總との再會がなされたか如何かに就て更に検討して見たい。

濂溪と常總との交渉に關しての資料を見るに次の如きものがある。

元公初與<sub>三</sub>東林總<sub>一</sub>遊、久<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>入、總教<sub>三</sub>之靜坐、月餘有<sub>レ</sub>得、以<sub>レ</sub>詩呈曰、書堂兀坐萬機休、日暖風和草自幽、誰道二千年遠事、而今只在<sub>三</sub>眼晴頭、總肯<sub>レ</sub>之、即與<sub>レ</sub>結<sub>三</sub>青松社<sub>一</sub>。（宋元學案、卷一三）

又扣<sub>三</sub>東林總禪師<sub>一</sub>、總曰、吾佛謂實際理地、即眞實無妄誠也、大哉乾元、萬物資始、資<sub>三</sub>此實理<sub>一</sub>、乾道變化、各正<sub>三</sub>性命<sub>一</sub>、正此實理、天地聖人之道至誠而已、必要<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>一路實地工夫<sub>一</sub>、直至<sub>レ</sub>於一旦豁然悟入<sub>レ</sub>、不可<sub>レ</sub>只在<sub>三</sub>言語上<sub>一</sub>會<sub>レ</sub>、又嘗與<sub>レ</sub>總論<sub>レ</sub>性<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>理法界事法界<sub>一</sub>、至<sub>三</sub>於理事交徹<sub>一</sub>、冷然獨會、遂著<sub>三</sub>太極圖說<sub>一</sub>、語語出自<sub>三</sub>東林口訣<sub>一</sub>、因遊<sub>三</sub>廬山<sub>一</sub>、樂<sub>二</sub>其幽勝<sub>一</sub>、遂築<sub>レ</sub>室焉。（居士分燈錄、周子條）

上掲の宗元學案並に居士分燈錄の記事に徴して見るに、南昌以外廬山の東林に於て兩者の會見交遊がなされた如くで

(東林常總)

仁宗天聖三年  
西紀一〇二五年

十一歲  
文兆法師により  
出家

二十六歲

三十歲

三十二歲

← 間年十二約從隨に南遊 →

四十五歲  
慧南寂後沝潭に  
住す

四十九歲

五十六歲  
廬山東林禪院に  
住す

六十七歲  
哲宗元祐六年  
西紀一〇九一年寂

宋學の源流に於ける禪的環鏡

(周濂溪)

三十八歲  
四十歲

南昌會見

五十四歲  
五十七歲

廬山會見

ある。上述の佛祖通載に於ける

元豐三年詔革江州東林律居爲禪院、觀文  
殿學士王公韶出南昌、欲延寶覺心公、心  
舉總自代。

に依ると常總是神宗元豐三年(西紀一〇八六)  
齡五十六の時に東林禪院に轉住しているが、  
然し濂溪はそれより七年以前即ち熙寧六年  
(西紀一〇七三)に世を去つてゐる。それで兩  
者が會見したとすれば合州以後即ち四十五歲  
頃から歿した五十七歲迄の約そ十年間、殊に  
濂溪が廬山に退嬰した五十四歲以後約そ數年  
間に會見が行われたものと推定したい。茲を  
以て宋元學案には

元公初與東林總遊、久之無所入、總  
教之靜坐、月餘有得。

或は居士分燈錄には

又扣東林總禪師。

又嘗與總論性及理法界事法界。

と記する所以である。これ等の事は廬山の東

林に於てなされたものと考へたい。濂溪は常總に參禪問道して至道は言詮不及底にして參究を要すこと、並に靜坐が省悟の唯一の方法であること等を懇諭して居り、尙管て性及び理事法界に就て互に論じ濂溪は獨會する所あり。居士分燈錄（周子條）にも

然易理廓達、自<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>東林開遮拂拭、無<sub>レ</sub>絲<sub>一</sub>表裏洞然。

とある如く濂溪の思想學說に及したる常總の影響も鮮少でなかつたと思はれる。尙濂溪の圖說作者は主として東林の啓發によるものとも考へられる。兩者の交遊關係を表記すると前項の如くである。

### (三)

上論の如く鶴林壽涯、黃龍慧南、佛印了元、晦堂祖心、東林常總の五項に互つて濂溪との交渉を詳細検討してきたのであるが、これに依つてその關係に親疎長短の差はあるにしても五禪師との交遊は是認すべきで、彼が參禪辨道して得たる禪的影響とその感化は多とすべきである。五禪師と彼との交渉を要約すると次の如くである。

A 鶴林壽涯の項に於ては、郡齋讀書志に於ける景迂説の如く壽涯を以つて濂溪の學師として兩者に交渉のあることを認め、その從學は潤州鶴林寺に於て濂溪の十五歲頃から二十四歲頃迄の間と推定することが出來た。(一)に於て既述したる如く兩者の廬山會見説並に學友胡武平の壽涯師事説に就ては疑問であるが、然し壽涯並に胡武平の濂溪に與えた禪的影響は否定することが出來ないと思はれる。

B 黃龍慧南の項に於ては濂溪が南昌に知縣として赴任したる至和元年から嘉祐元年即ち三十八歲から四十歲迄の約そ三年間黃檗の積翠に於て慧南との交渉がなされたことを推定した。慧南より受けたる禪的影響は勿論であるが、尙慧南の法嗣である親友潘興嗣を通して得たる禪的感化も没し去ることは出來ない。

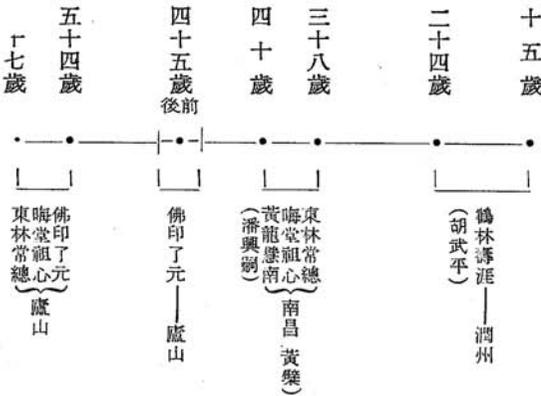
C 佛印了元の項に於て、濂溪が了元に參禪問道し彼を青松社主としてゐるから、兩者交渉のあることが窺見せら

れる。了元が開先の法を嗣いだ二十八歳以降約そ二十年の廬山在留であるが、廬山に於て濂溪四十五歳前後と五十四歳以後との數年間に交渉がなされたのであるが、前者より後者の方がより確實性が強いと思われる。

D 晦堂祖心の項に於ては、濂溪は祖心と南昌及び廬山に於て邂逅がなされたとしたが、後者の場合は濂溪五十四歳以後數年間である。前者は彼が南昌に赴任した三十八歳以降四十歳合州赴任迄の間であつて濂溪は祖心と共に慧南に從學していたので祖心との交渉はなされたとすべきである。

E 東林常總の項に於ては、常總の會見は南昌と廬山とに於てなされたとした。前者に於ては常總も祖心、濂溪と共に南昌の會下にあつたので、常總との交渉は認むべきでその期間は濂溪の南昌在任二年である。後者に於ては濂溪五十四歳以後の數年間であると推定した。

以上五禪師の各項に於て濂溪との交渉に關しての事項を要約したのであるが、更にこれを纏めて見るならば、濂溪は十五歳頃から二十四歳頃迄の青年期に於て潤州鶴林寺僧壽涯に師事し、その三十八歳から四十歳迄と四十五歳前後との中年後期即ち前者に於ては南昌在任中黄檗に於て黄龍慧南、及びその會下の晦堂祖心、東林常總に隨從して修禪して居り、後者に於ては四十五歳前後頃廬山に於て佛印了元と交遊して居ると思われし、晩年五十四歳以後には廬山に於て佛印了元、晦堂祖心、東林常總の三師と交遊して儒禪の學に就て論じあつて居る。五禪師の各項の終に濂溪との交渉圖表を附記しておいたが、上述の参考にもなるから便宜上更にこれを一括して表記すれば上圖の如くである。



學の源流に於ける禪的環境

かくの如く濂溪は壽涯、常總、祖心、慧南、了元の五禪師と交渉がなされたと推定したが、その交遊に依つて禪的な啓迪と琢磨を受け濂溪の思想、性格に禪的影響を及ぼしたことは鮮少でなかつたと思われる。常盤大定氏が「周子は了元との交渉に於てその哲學的基礎を深めたるならんと思はる」(支那に於ける佛教と儒教道教)と述べているが、慧南、祖心、常總との交渉に依ることも認むべきである。尙、濂溪の學友である潘興嗣と胡武平との交遊を通して得たる禪的感化も否定することは出来ない。尙、茲に看過することの出来ないことは、その時代的、地理的な環境で一言これに觸れて置く。その時代的環境に就ては本論作に依つて明かである如く論述する迄もないことであるが、宋代は禪宗の極盛期で當代を風靡したるその禪的影響は顯著で没することは出来ない。かくの如き事情が仁宗治世四十二年間と神宗熙寧六年迄の五十年間に於ける思想界の特異性でありその動向であるが、かくの如き思想的傾向の社會に最も永く生活し活動したるものは濂溪であつたのである。次にその地理的環境に就てこれを見るに、濂溪が居住したる所は悉く江西省で、彼と密接な關係をもつその洪州は禪宗の淵藪で馬祖道一以後多くの禪界の巨匠が輩出して盛んに禪幡を高揚したる所である。濂溪の禪的環境を見る上に此の時代的、地理的な事情を無視することは出来ない。實に濂溪は上述の如く條件の具つた恵まれた然も豊かな禪的雰圍氣の下にあつたので、自然思想的にも性格的にも禪的型にならざるを得ない事情にあつたのである。濂溪に従學したる程子が師を「周茂叔窮禪客」と評したことは、却つて反證ともなつて濂溪と禪との關係を肯定するもので、彼が弟子に對して所謂「顏子所樂如何」に依つて靜坐工夫せしめたもので禪的公案とも見るべきで、その思想に於て禪の及ぼしたる影響は實に大きく周子以後の諸儒に禪的色彩のあるは論を俟たざる所である。此の公案靜坐說並に窮禪客說に就て大定氏は同書(二〇六頁)に於て是認して居るが、荻原氏は同書の常盤說の批評(自一九〇頁至一九六頁)に於てこれを誤謬として否認している。尙、荻原氏は大定說が總べて矛盾、不整合、誤謬であると駁しているが酷評としか思われない。原始儒教とは趣を異にした深みのある哲學的色彩を帯びた宋代儒學の基盤が、主として濂溪に依つて構成されたのも彼の禪的行修に起因しているとするべきである。茲を以て濂溪を中心とした宋學の源流には以上の如き禪的雰圍氣のあることを無視することは出来ない。(文部省科學研究費に依る昭和二八、三脱稿)